

# 大成功の評価・スキー0 世界選手権

スキーオリエンテーリング世界選手権 2009 ルスツ大会

ナショナルコントローラ  
木村佳司

日本におけるスキーオリエンテーリング世界選手権 2009。その成功とは何なのか。

2009年3月3日-8日 北海道留寿都村  
世界スキーオリエンテーリング選手権大会

## 「成功」とは何か？

モノの評価は人によってさまざまに分かれるだろう。今回の開催されたスキーオリエンテーリング世界選手権 2009 ルスツ大会についても同じだろう。

私の世界選手権に対する評価は「大成功」である。

## 目標の設定

「それは何をもって世界選手権の成功とするのか。その目指すレベルを確認したい。」準備委員会の最初の会合で私はそう切り出した。

0. 財政的に負の遺産を作らない
1. 開催すること自体
2. 公平な競技の提供
3. 良い競技環境の提供
4. コアメディア・会場サービス
5. マスメディア・一般者への認知

個々のレベルの詳細説明は割愛するが、準備委員会では成功の目標レベルを「2」に置こうという話し合いが行われた。

オリンピック・サッカーワールドカップなどマスコミに登場するスポーツ国際大会に比べたら、ささやかな目標設定だが、それが日本の実力を考えたときの現実的な目標だった。

もちろん、これは IOF と協議したものではない。あくまでも日本の中の、もしかしたら私だけの評価軸だったのかもしれない。

## 結果 - 大成功

では世界選手権は目標に対してどの程度までが実現できたのか。間違いなく「2. 公平な競技の提供」のレベルではない。「3. 良い競技環境の提供」も実現できてしまった。そして何よりも重要なのは負の遺産を作らないことが、達成できていることである。

結果は目標を大きく超えた。これを大成功と呼ばずして何と呼ぼう。少なくとも私の気持ちの中では「大成功」である。

## 実行委員の理念と熱意

通常の地元イベントに比べて、何かと手間の多い国際大会。だがそこに参集してくれた実行委員の理念と熱意がこの大会を成功へと導いたといってもいい。

IOF のオリンピックプログラムの理念に共感し、開催すること自体を目標として世界選手権を日本へ誘致した人たち。それを実現するために、要項やプログラムを作成した人たち。

財政的に負の遺産を作らないために、補助金を手配し、募金を集め、支出を厳密に管理した人たち。

公平な競技環境を実現するために、地図を作成し、コース、コントロール設定、地図交換、計時に注力した人たち。

良い競技環境の提供のために、スキートラックを整備した人たち。会場整備、輸送、ワクシング環境など選手のケアをしてくれた人たち。

会場サービスやメディアへの情報提供として、会場放送、結果配信、動画配信、写真撮影などに力を発揮した人たち。

終わってみれば、当初のミニマム目標だった範囲を大きく超えた結果を残してくれた。

## 高い評価

世界選手権 2009 は参加チームからも高い評価を得られた。開催前はそれほど評価を得られると思っていなかっただけにこれは素直に喜びたい。実行委員、関係者の方々、会場となったルスツリゾートの皆さんのおかげである。

## 実績は永遠

今回、日本で世界選手権を開催したという実績は永遠に残る。この実績こそ IOF (国際オリエンテーリング連盟) がひとまず手に入れたいと思っていたものだ。

これでスキーオリエンテーリングの広がりアジア地区に及んでいることを証明する材料が揃った。これをひとつの実績として、スキーオリエンテーリングの冬季オリンピック入りを目指して活動が行われる。

成功したあかつきには、その影響はスキーオリエンテーリングのみならずフットオリエンテーリングにも及ぶことが期待される。



ロング種目男子スタートの地図配布  
人手が足りずに役員として駆り出されるヒュー・カメロン IOF 副会長 (右)  
帰りの千歳空港でフライト直前に会い、硬く握手した彼は「Thank You」を連発した。これは IOF から日本へ贈られた言葉である。

## コントローラをやらないか？

ここから個人的ないきさつを少し。3年前、世界選手権のコントローラをやってもらえないかと武石氏から打診があった。

「何でもやりますよ。」

この瞬間から世界選手権への国内コントローラになることが決定した。このときから、私は開催目標を理解していた。

財政的にも人的にも無理な要望が IOF アドバイザ (SEA) から出されることは判っていた。私の役目は、無理なもの難しいものは No と言い、財政的・人的・社会的な理由を説明し、その結果大会を「成功」へと導くことである。

キーパーソンの信原氏、高島氏もそんなことはとっくに見抜いていた。No と言えるニッポンが結果的に大会を成功へと導くと考えたのだ。

だが IOF アドバイザもさるもの、フィンランド人の助っ人を 3 人も用意して我々が No と言えない働きをやってしまったのだ。これはすごい。

こうしてフィンランド人軍団の熱意と働きもあり、終わってみれば大成功だった。

(木村佳司)